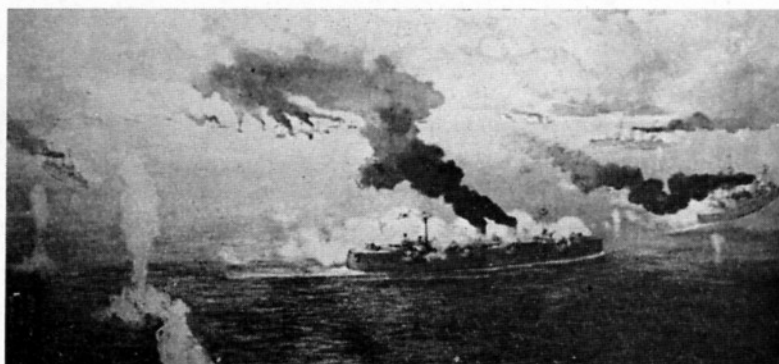


明治27年黄海海戦

Battle of the Yalu, 1894

by Shigeo Takahashi

高橋 茂夫



「黄海海戦の実景」と題した当時の絵画。画面手前を左方に旋回しつつあるのはわが第1遊撃隊で、遠く密集して見えるのが清国艦隊である。

日清戦争の帰趨を決した黄海海戦が戦われてから、この9月17日ですでに満68年になる。遠い前世紀の海戦の詳細は、次第に忘却の彼方に消え去ろうとしているかに見えるが、忘れてならないのはこの海戦の近代海戦略および造艦政策に与えた甚大な影響である。史上最初の近代海戦として、少なくとも艦船に興味を持つものにとって、黄海海戦の実相は必須の基本知識と断じて過言ではなからう。以下明治海軍史の権威高橋茂夫氏の簡潔な筆になるその経緯を御熟読乞う。……………〈編集部〉

明治27年（1894年）9月17日、黄海北部で日清両国艦隊の戦った黄海海戦（注1）は、両国海軍ともに微力で、海戦の規模もしたがって小さかったが、艦隊戦闘としてはわが海軍にとってばかりでなく、19世紀におけるいわゆる海軍革命後の最初のものであって、海軍史上その意義は極めて深いものがある。

明治27年、清国に対し開戦を決意するにあたって、わが大本営（注2）は次の要旨の作戦大方針を定めていた。

第1期

第5師団は、朝鮮で牽制動作をし、艦隊は進んで敵艦隊を掃滅して、ポツ（渤海）海および黄海を占領することを努める。

第2期

甲）わが艦隊が目的を達したときは、陸軍をポツ海湾頭に送って決戦する。

乙）艦隊の勝敗が決しないときは、陸軍を続けて朝鮮に進め、敵を撃退する。

丙）わが艦隊が不利で、敵がまったく海を制するときは、できる限り第5師団を助け、内国の兵は敵の襲来を待って撃退する。

同年7月13日、従来の常備艦隊のほか臨時に警備艦

隊が編成されたが、同19日これを西海艦隊と改称するとともに、常備・西海両艦隊をもって聯合艦隊を編成し、常備艦隊司令長官・同幕僚をそれぞれその司令長官に充て、即日聯合艦隊司令長官にあて、朝鮮西岸を制し、清国がさらに軍隊を増派するときは、その艦隊および運送船を破砕すべき旨の命令が発せられた。

すなわち聯合艦隊司令長官は、集合を終った麾下艦艇を率いて23日佐世保を進発し、艦隊の一部は25日ブン（豊）島付近で敵艦に遭遇して、おおいにこれを破ったのである（豊島沖海戦）。

8月1日両国は宣戦した。2日司令長官はさらに敵海面を制するため敵艦隊を撃破すべき旨の命令を受領し、全勢力をあげて10日未明ウェイハイウェイ（威海衛）港口に迫ったが、敵を見ぬまむなくコクンサン（古群山）群島（注3）に帰投し、さらに朝鮮南岸の長直路（注4）に退いた。

今や艦隊決戦の時期は予測し難くなり、年内にポツ海湾頭の決戦を行なう望みは絶えた。大本営は作戦大方針乙の場合に準拠して作戦を進めることを決め、すでにソウル（京城）付近に集中している第5師団に続いて第3師団を送り、次いで両師団を基幹とする第1軍を編成して、この作戦に充てることとした。

聯合艦隊は命により19日発動、第5師団の一部のブサン（釜山）からインチョン（仁川）への回航を掩護したが、師団は敵の集中しつつあるピョンヤン（平壤）の攻撃を企図していて、続いて攻撃実施の際およびその後の前進について艦隊の応援を求めた。

聯合艦隊司令長官は、ピョンヤン攻撃の際、小艦艇をテートン川（大同江）に進めて応援することを決したが、たまたま第3師団輸送護衛の内報に接し、また敵艦隊が

来襲を企図しているという情報を入手したので、これと
とりやめた。

しかし、第5師団応援のことは大本営も強く要望する
ところで、9月6日、戦況視察および作戦計画に関する
要務を帯びた大本営海軍参謀官樺山資紀中将(注5)が長
直路に到着して協議するところがあったが、10日第3師
団を乗せた運送船が集合するとともに、第1軍司令官山
県有朋陸軍大將もまた来会して、インチョン到着後、8
月31日行動を開始した第5師団の戦況が判明するまで、
艦隊は同方面にとどまって上陸を掩護することに決し
た。ここにおいて艦隊は、運送船を護衛して錨を抜いた
のである。

当時、朝鮮の道路は極めて不良で、軍を進めるには適
せず、特に兵站輸送はほとんど望みがない上に、沿道も
極めて貧しく、物資の現地調弁も不可能に近
かったため、朝鮮西岸における海上輸送を安
固にすることに対する要望は、はなはだ強い
ものがあつた。

注1 海洋島沖海戦、大孤山沖海戦などと
呼ばれることもある。ヨーロッパ方面では
ヤールー川沖海戦とすることが多い。

注2 戦時、天皇の下に置く最高統帥部。
すでに最初の出兵に先立ち6月5日設置さ
れ、天皇直属の侍従武官および軍事内局の
ほか、参謀総長統轄の下に陸軍参謀官、海
軍参謀官、兵站總監部などが置かれていた。

注3 当時は隔音群島といった。チョンナ
(全羅)北道の西岸。

注4 チョンナ南道の南岸、ワン(莞)島
の東方。

注5 軍令部長、大本営の首席海軍参謀官
であるが、明治16年、陸軍少将で海軍大輔
(後の次官)に任ぜられ、翌年海軍少将に転官、その
後海軍大臣を経て枢密顧問官に任ぜられ、開戦に際し
てにわかに現役に復し、軍令部長に補せられた。艦隊
勤務の経験のまったくない軍令部長である。

聯合艦隊の編成および区分

当時聯合艦隊司令長官は、常備・西海両艦隊を合わせ
て、次のように区分していた。

第1游撃隊 吉野・高千穂・浪速・秋津洲
本 隊 松島・千代田・厳島・橋立・比叡・扶
桑
第2游撃隊 金剛・高雄・葛城・大和・武蔵・天竜
水 雷 艇 6隻

本隊、第1游撃隊の諸艦ならびに筑紫・摩耶・愛宕・
八重山・海門および天城は常備艦隊、山城丸・近江丸お

よび水雷艇は同隊付属、西京丸は西海艦隊付属、その他
は西海艦隊であつて、常備艦隊司令長官伊東祐亨中将は
松島に、同隊司令官坪井航三少将は吉野に、西海艦隊司
令長官相浦紀道少将は金剛に、それぞれ将旗を掲げてい
た。なお愛宕および大島は、当時内国で修理中であつた。

聯合艦隊司令長官の決心

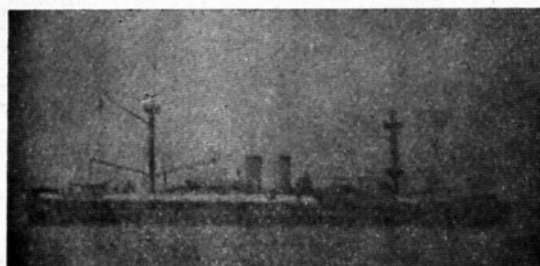
聯合艦隊は、10日夕刻運送船を護衛して長直路を出発
したが、武蔵に故障を生じたので分離帰航させたほかは
無事に進航し、12日朝八重山に運送船の誘導を、また西
海艦隊司令長官に対して第2游撃隊を率いて上陸に助力
し、続いて八重山をあわせ率いて本隊に合すべき旨を命
じて、いずれもインチョンに向わせ、さらに第5師団の
戦況およびテートン川における応援の要否を確かめるた
め海門を同港に派遣し、さらに第1游
撃隊(浪速、秋津洲は欠航)にウェイ
ハイウェイ偵察を命じて出発させ、警
戒の処置をしたのち主力を率いてチャ
ンボネー(蒼浦内)(注6)西方に停泊
し、炭水を補充させた。樺山参謀官は
西京丸で艦隊と行動をとにした。

13日午後、第1軍参謀長は朝鮮国公
使館付新納時亮少佐とともに海門に便
乗して来航し、樺山参謀官を訪問して
テートン川方面応援について述べると
ころがあり、樺山参謀官も敵艦隊が陸
軍応援のためテートン川にあるのでは
ないかと疑い、インチョンの現状は断
じて危険はなく、むしろピンヤンの
攻撃こそ急務であると判断したが、夜
半、高雄が第5師団主力はすでに11日
テートン川渡河を始めた旨の通報をも
たらすに及び、随行の大本営海軍参謀官伊集院五郎少佐
(注7)を使いとして、聯合艦隊司令長官の意見をたた
いた。

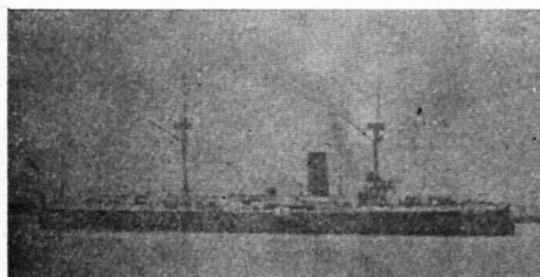
ここにおいて聯合艦隊司令長官は、第2游撃隊および
八重山をインチョンにとどめ、主力を率いてテートン川
に回航し、第3游撃隊を同川に進めて陸戦を応援させ、
本隊などをもってこれを掩護することを決心した。14日
午前、第1游撃隊が掃投してウェイハイウェイには敵主
力がいないことを報告し、聯合艦隊司令長官は、同日16時
00分主力を率いて出発、途中搜索しながら15日午前チャ
ンサンコツ(長山串)(注8)付近に達し、第3游撃隊・
天城・磐城・山城丸および水雷艇をテートン川に分遣し
て、13時20分その他の諸艦をチャンサンコツ北東方の錨
地に投錨させ、さらに石炭を補充させた。また修理を終
った武蔵は直航してこの日先着し、合同したが、司令長



樺山資紀。明治28年5
月大將昇任の際の写真



定遠



靖遠

官は同艦をテートン川に派遣して赤城を呼び戻した。

今やこの方面にも敵のいないことは明らかとなった。先に内国出発前、敵艦隊が運送船を護衛してヤールー川（鴨綠江）方面に往来している旨の情報を得ていた樺山参謀官は、なおチャンボネー付近に滞在中、大本営陸軍参謀官福島安正陸軍歩兵中佐がホワンチュ（黄州）から11日新納少佐あてに発した「本日大同江ニ於テ支那船ヲ捕ヘテ左ノ事ヲ知レリ。奉天練軍ヲ孤山ニ出シ小鹿二島ノ近海ヲ警戒スト。委細手紙」との電報を見ていて、あるいはこの情報のようなこともあろうと考え、陸軍応援は小艦しか用はないのに、艦隊主力がむなしくここにとどまる必要はないと判断し、再び伊集院参謀官を使いとして、司令長官に勧告するところがあった。

ここにおいて司令長官も遂に急速出航して黄海北部を捜索し、敵に会わないときはポツ海湾に進入してあくまで決戦することを決心し、16日朝、各艦に石炭の現在量を問い、同日夕刻出発してハイヤン（海洋）島、シャオルー（小鹿）島、ウェイハイウェイ、ターリエン湾、リュイシュン（旅順）、タークー（大沽）、シャンハイコワン（山海関）、インコウ（營口）、ウェイハイウェイを巡って、24日帰投する日程を定めた（注9）。

注6）別名、カロリン（加露林）湾。

注7）軍令部第1局々員、第

2局長心得兼勤。

注8）別名、チヨッベキ（小乳蘆）角。

注9）チャンボネー以来、艦隊の行動は樺山参謀官の主導によって決まったように見える。当時艦隊では、ひそかにこれを歌にしていたという。また後年驚城鶴崎熊吉は、「時の軍令部長樺山の西京丸に乗って戦争見物に出懸けしは暴虎憑河の勇に似たれど、実は伊東艦隊を鼓舞監督せんが為にして、当時樺山は伊東に向ひて『オハンは東京に立派な家を新築したるが故に丁汝昌と戦ふを好まざるべし』と冷罵し、……」とまでいっている（薩の海軍長の陸軍）が、これには少し誇張があるろう。

会敵

艦隊は16日17時00分錨を抜き、第1游撃隊を先頭にして赤城および西京丸を本隊の右側に従え、

まずハイヤン島に向った。時

も南西の風が勢いを増し、断雲は陰暦8月17日の月をかすめて小雨をもたらし、電光も時にひらめいて、いたく遠征将士の胸を打つものがあった。

明けて9月17日天明、艦隊はハイヤン島付近に達し、その西方に進んで港内を偵察して敵のいないのを確かめたのち、針路をターフー（大孤）山沖にとった。雨はあがって、天晴れ気澄んで風起らず、波も立たず、さわやかな秋晴れとなった。

10時23分、吉野は右艦首水平線に一条の糸のような煙を認め報告したが、やがて二条、三条、四条となり、ついに敵であることは疑いがなく

艦名	艦種
扶桑	甲鉄コルベット
比叟	鉄甲帯コルベット
嚴島	海防艦
松島	"
橋立	"
千代田	甲鋼帯巡洋艦
吉野	巡洋艦
浪速	"
高千穂	"
秋津洲	"
赤城	砲艦
西京丸	巡洋艦代用

艦艇名	艦艇種
定遠	甲鉄砲塔艦
鎮遠	"
来遠	"
経遠	"
靖遠	巡洋艦
致遠	"
濟遠	"
揚威	"
超勇	"
平遠	甲装砲艦
広甲	スループ
広丙	水雷砲艦
福竜	水雷艇



清国北洋水師提督丁汝昌

第1表 海戦参加帝国軍艦一覧表

排水量 (トン)	速 力 (ノット)	装 甲 (ミリ)				兵 装			進水年	記 事
		装 甲 帯	露砲塔壁	胸 壁	防禦甲板	大 砲	機 砲	発射管		
3,777	13	鉄 229	—	203	—	24cm×4, 17cm×2, 7.5cm×6	9	2	明治11	艦 質 鉄
2,284	13.2	" 114	—	—	—	17cm×3, 15cm×6, 7.5cm×2	6	"	" 10	" 鉄骨木皮
4,278	16	—	300	—	水平部 40 傾斜部 30	32cm×1, 12cm速×11, 47mm速×18	1	4	" 22	
"	"	—	"	—	" "	32cm×1, 12cm速×12, 47mm速×15	"	"	" 23	
"	"	—	"	—	" "	32cm×1, 12cm速×11, 47mm速×18	"	"	" 24	
2,439	19	鋼 92	—	—	" 30 35	12cm速×10, 47mm速×14	3	3	" 23	
4,225	22.5	—	—	—	" 44 114	15cm速×4, 12cm速×8, 47mm速×22	—	5	" 25	
3,709	18	—	—	—	" 51 76	26cm×2, 15cm×6, 47mm速×2	14	4	" 18	
"	"	—	—	—	" "	"	"	"	" 18	
3,172	19	—	—	—	" 38 76	15cm速×4, 12cm速×6, 47mm速×10	4	"	" 25	
622	10.5	—	—	—	—	12cm×4, 47mm速×6	—	—	" 21	
4,100(?)	15	—	—	—	—	12cm速×1, 57mm速×1, 47mm速×2	—	—	" 21(建造)	総トン数 2,913 トン

第2表 海戦参加清国艦艇一覧表

排水量 (トン)	速 力 (ノット)	装 甲 (ミリ)			兵 装			進水年	記 事
		装 甲 帯	砲 塔 壁	防禦甲板	大 砲	機 砲	発射管		
7,314	14.5	鋼 356	305	—	30.5cm×4, 15cm×2, 7.5cm×4, 47mm速×4	8	3	明治14	
7,310	"	" "	"	—	"	"	"	" 14	
2,900	15.5	" 240	200	40	21cm×2, 15cm×2, 7.5cm×2, 47mm速×2	6	4	" 20	
"	"	"	"	"	"	"	"	" 20	
2,300	18.0	—	—	77	21cm×3, 6in×2, 57mm速×8, 47mm速×2	10	"	" 19	
"	"	—	—	"	"	"	"	" 19	
"	15.0	—	250	22	21cm×2, 15cm×1, 鋼砲×4, 47mm速×2	9	"	" 16	
1,350	"	—	—	—	10in×2, 40斤×4, 9斤×2	10	—	" 15	
"	"	—	—	—	"	"	—	" 15	
2,100	11.0	鉄252~203	203	—	26cm×1, 15cm×2, 57mm速×2, 47mm速×4	4	1	" 20 または21	
1,296	15.0	—	—	—	15cm×2, 12cm×4	"	—	" 20	艦質 鉄骨木皮
1,000	17.0	—	—	—	12cm速×3, 57mm速×4	"	4	" 24	" "
115	23.0	—	—	—	—	2	2	" 18	

備考 1. 水雷艇3隻は略す。 2. 運送船の直接掩護に任じた砲艦2隻は省く。

なり、「敵艦隊3隻以上東方＝見ユ」と報じた。時に11時30分であった。

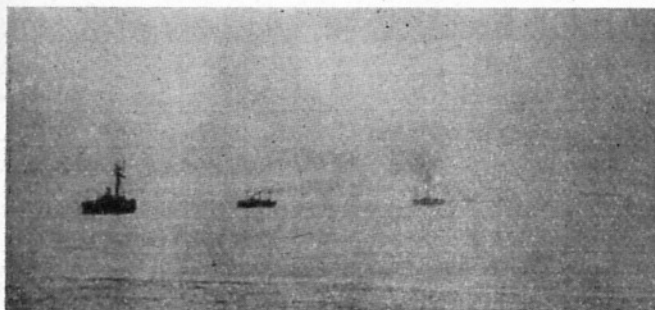
敵艦隊の状況

清国の陸海軍は地方官の管轄に属するもので、海軍もまた北洋、南洋、福建および広東の4水師に分れて各別に動作していた。そのうち、もっとも有力なのは北洋大臣に属し、ウェイハイウェイを基地とする北洋水師であって、わが聯合艦隊に対戦したのも、これにまったく偶然の事情から広東水師の広甲、広乙（豊島沖海戦で大破、自決）、広丙および福建水師の水雷艇福竜が加わったものであった。

その官制も陸軍に範をとったもので、陸軍が營（約500

人）を単位とし、数營を合して總兵官（少将相当）または副将（大佐相当）が統率し、さらにこれを合して提督（中将相当）が統率する制度であったから、北洋水師も提督の下に總兵官・副将以下を置き、總兵官は2人でこれに左翼總兵官・右翼總兵官を称せしめ、幕僚を除いて副将以下は中軍・左翼・右翼などに分け、さらに各中營・左營・右營などに配し、各1營を1艦艇に充てた（中軍中營を致遠、左翼左營を経遠に充てる類）。しかしこれは、用兵上の意義はまったくないので、2人の總兵官も鎮遠・定遠の艦長たるにとどまり、司令官のような職権は持たなかった。

当初、清国側は陸軍をまずビョーヤンに集めたのち、わが軍を朝鮮から駆逐することを作戦の方針とし、海陸



9月19日早朝チャンサンコツに入るわが艦隊主力。左から橋立、千代田、厳島、扶桑の順序。

から陸軍を朝鮮北部に送りつつあった。

丁汝昌提督は、9月16日定遠に座乗して艦隊を率い、陸軍運送船を護衛してターリエン湾を出発、同日14時00分ヤールー川口の西にあるタートンコウ(大東溝)に入り、上陸掩護中、17日10時00分南方水平線に煙を認め、わが艦隊であろうと判断して、平遠以下の4隻および水雷艇を残し、主力を率いて出撃したものである。

両軍の勢力

戦場に現われた両軍の艦艇は、第1表および第2表に示すとおりである。

両軍とも備砲の多くはドイツの克式(Krupp) 橋盤砲であるが、わが松島・厳島・橋立のいわゆる三景艦の主砲が、フランスの加式(Canet) 32センチ 露砲塔砲であること、三景艦・吉野・千代田および秋津洲の15センチおよび12センチ砲が、みなイギリスの安式(Armstrong) 速射砲(注10)であることは、清国側に装甲堅固なものの多いこと、定遠・鎮遠の30.5センチ 露砲塔砲計8門とともに特に注目をひくところであった。またこの両艦の巨砲が前部両舷にあるのを初め、清国諸艦はむしろ艦首砲火が強大であるのに、わが方はいかえて舷側砲火の威力発揮を有利とする兵装であったのも注意しなければならない。

魚雷は、吉野がイギリスの保式(Whitehead) 36センチのものを備えたのを除いて、両軍ともにドイツの朱式(Schwarzkopf) を用いたが、わが三景艦・千代田・秋津洲のものは88式(45センチ)、その他は両軍とも84式(36センチ。有効射程400メートル、平均速力22ノット、装薬量20キロ)であった。

注10) Quick-firing Gun。今日の Rapid-firing Gun と異なり、1発ずつ人力で尾栓を開閉して装填するのであるが、橋盤砲の6倍という射撃速度に期待がかけられた。もっとも、無煙火薬を吉野しか用いないので、幾分遺憾なものがあつた。

戦 策

聯合艦隊司令長官は、開戦当初、戦闘規約の名で次のように戦策を定めていた。

戦闘規約

第1 戦闘陣形

戦闘陣形ハ単艦単位ノ単縦陣トス

第2 運動

単縦陣ノ方向変換ハ一々信号ヲ為サス諸艦ハ宣シク旗艦ノ通跡ヲ進ムコトニ注意スヘシ。運動ノ大眼目トスル所ハ、常ニ成ルヘク我勢力ヲ纏メテ敵ノ一部分ニ乗シ、先ツ之ヲ打破リ、更ニ復タ他ノ部分ニ当リテ之ヲ撃沈メルト云フカ如ク、片端ヨリ之ヲ押片附クルニ在ルコトヲ記憶スル事

第3 戦闘開始ノ時機

大砲ハ濫リニ慌シク打方ヲ始メシムルコト無ク、充分奏功ノ望ミアル距離ニ達スル迄、成ルヘク我慢シテ差控ヘ、兵氣ト砲力ノ充滿スルニ至リテ、一時ニ猛烈急劇ノ射撃ヲ為スコトニ注意スル事

第4 各艦長自由運動ヲ為ス場合

別紙戦闘中ノ特別信号ニ於テ定メタル不盲旗(否信旗) 1 旗ノ信号未タ之ナキ内ト雖モ、我陣形若シ紛乱シテ己ヲ得サル場合、又ハ敵ヨリ衝突ヲ仕掛ケラルヘカ如キ場合ニ際シテハ、艦長ハ之ニ応スル臨機ノ処置トシテ、如何ナル自由ノ運動ヲナスモ妨ケ無シト雖モ、徒ラニ人ニ先シ功ヲ貪ラムトスルカ如キ心術ヲ以テ、恣ニ列ヲ離レテ独立ノ動作ヲ為スヲ許サス、是レ唯ニ軍紀ニ於テ有間敷事ナルノミナラス、一人ノ功名ヲ現サムカ為ニ、全軍ノ不利ヲ醸ス恐アレハナリ、又既ニ許サレテ自由ノ動作ヲ為ス場合ト雖モ、次ノ件々ハ尙ホ常ニ服膺スヘキ事

- 1) 常ニ人ヲシテ旗艦ノ信号ニ注意セシムル事
- 2) 甚シク本隊ヲ離レテ孤立ノ位置ニ陥ラサル事
- 3) 2 艦群隊単位ノ時ノ如ク隣艦ハ成ルヘク結合ヲ保チテ互ニ協力スヘキ事

第5 (斥候のこと。略)

第6 游撃隊ハ最初ノ戦列ニ加ラス、機ヲ見テ敵ノ混雑セル部分ニ乗スルカ、又ハ運送船ヲ追撃スヘシ

また別に、夜間戦闘についても規約を定めたが、「航行中暗夜ノ戦闘ハ、我運動上非常ノ混乱ヲ生シ、味方互ニ衝突ノ恐アルカ故ニ、相当ノ見込アルカ、又ハ止ヲ得サル場合ノ外ハ、求メテ之ヲナス」と示した。

清国側では、次の要旨の戦闘訓令を発していたという。

第1 同型艦は、協同動作して互いに援助することを努めること。

第2 各艦は敵に艦首を向けて位置するのを基本戦術とすること。

第3 各艦はできる限り旗艦の運動にならうこと。

戦闘の経過（１）

わが本隊は、3艦群陣の1（注11）をつくり、戦闘訓練を行ないながら進んでいたが、敵発見の報に接した司令長官は、直ちに単縦陣にもどし、西京丸および赤城を左側に避けさせ、12時03分旗艦松島のマストに高く大軍艦旗を掲げて戦闘を令した。

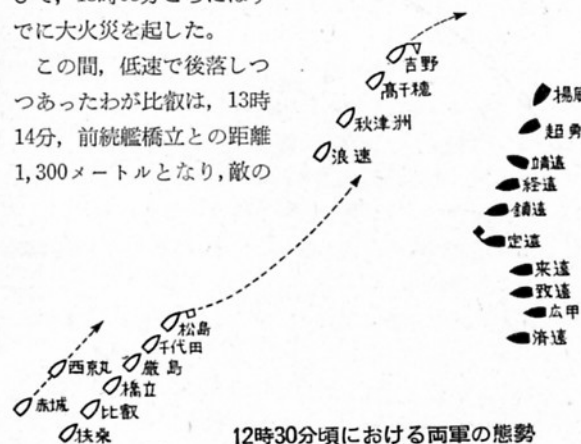
時に敵の主力は右舷艦首にあたり、煙を林のように立ち昇らせながら近づき、別に左舷艦首にも2～3隻の敵艦があり、その煙はしだいに左に移りつつあったので、12時18分 第1遊撃隊に「右方ノ敵ヲ攻撃スヘシ」と命じた。12時25分全軍に戦闘速力(10ノット)を令した。

第1游撃隊を率いた司令官は、12時05分本隊にならって戦鬨を、続いて「適当ノ時機ニ来レハ打方始メ」を令し、12時30分増速とともに「距離ニ注意セヨ」「速力ニ注意セヨ」と戒め、また攻撃の旗命を「敵ヲ遊撃スヘシ右翼」と解したので、距離12,000メートルに達するころ、ほぼ敵の中堅をさしていた針路を少し左に変え、その右翼に向った。

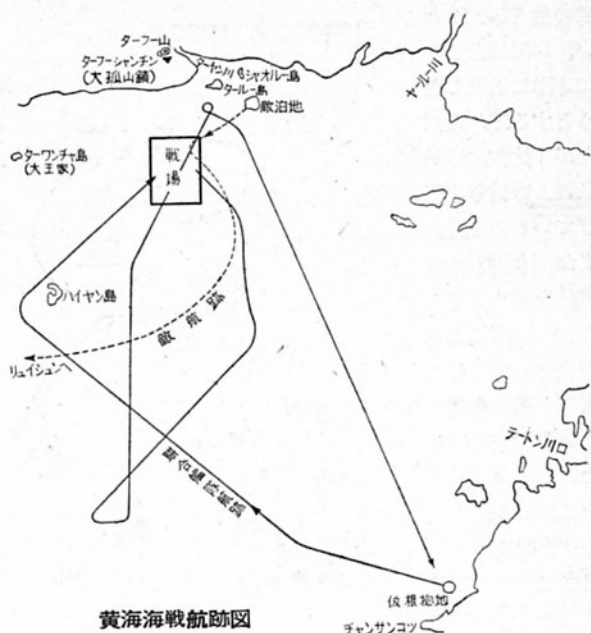
敵の主力は、定遠・鎮遠兩艦を角点として、後翼梯陣（注12）を作り、約7ノットで迫りながら、12時50分距離約6,000メートルで旗艦定遠の発砲とともにいっせいに砲火を開いた。わが松島もほとんど同時に「適当ノ時機ニ来レハ打方始メ」の信号を掲げ、12時52分発砲を始めた。時に距離3,500メートルであった。

第1游撃隊は、14ノットに増速して突進し、12時55分距離3,000メートルを測って吉野がまず発砲し、揚威・超勇を射撃した。わが本隊ならびに第1游撃隊の諸艦もこれにならって射撃を始め、敵の右翼を過ぎてしだいに針路を右に変えたので、これに伴って敵も方向を少しずつ右に変えたが、翼端の揚威・超勇は速力が遅いために孤立し、1,600～2,500メートルの距離からのわが砲火を浴びて、13時05分ごろにはすでに大火災を起した。

この間、低速で後落しつ
つあったわが比叡は、13時
14分、前続艦橋立との距離
1,300メートルとなり、敵の



12時30分頃における両軍の態勢



黃海海戰航跡圖

角点定遠および来遠の迫るところとなり、衝突を受けようとするに至った。同艦はこのとき決然として隊列を離れ、敵の中間に突入して両舷戦闘を行ないながら突破し、さらに揚威・広甲・超勇の合囲に陥り、苦闘する際、本隊が前路を左から右へ過ぎるのを認め、これに合しようとして殿艦扶桑の後方に進んだが、また定遠・鎮遠・来遠の追撃を受け、下甲板後部一帯を破壊されて火災を起した。この間の戦死20人、負傷は35人に達した。

先に非戦側に避けた赤城もしだいに後落して敵に暴露し、比叡を逸した来遠および左翼諸艦の合撃を受けて同じく苦戦し、たちまち戦死10人、負傷17人を出し、艦長坂元二郎少佐もまた13時25分、海図を鮮血に染めて壮烈な最期を遂げた。

すでにして第1游撃隊は、本隊殿艦の砲火と対向しそうになったので、13時14分射撃を中止して12ノットに減速し、次いで12時20分左180度の方向変換を行ない、本隊の外側を反航しようとした。敵はすでに明確な陣形を失ない、超勇は13時27分、タールー島の南西約10哩の所に沈んだ。

注11) 3隻ずつの群を1縦列とした陣。

注12) 制形不完全な鱗次横陣ともいう。

戦闘の経過 (2)

13時30分司令長官は第1水撃隊を招呼し、同隊はこれに応じて再び左180度の方向変換を行ない、15ノットに増速して本隊に並航しようとしたが、本隊も右に方向を変えつつあって果さなかったで、改めて10ノットに減速して、後尾に入る運動をしながら再び砲火を開いて数

回の射撃を行ない、14時15分まさに本隊に追及しようとする際、西京丸が「比叡、赤城危険」の信号を掲げているのを見、また両艦苦戦の実状を認め、さらに左180度に方向を変え、増速して赤城と敵の間に急進しようとした。

これより先、比叡は火災を消し、まさに扶桑に追及しようとするにあ

たって、燃え残りから再び火勢があがり、危険となったので、14時00分「本艦火災ノ為メ列外ニ出ツ」の信号を掲げ、南西に向って戦場を離れようとした。来速ほか2隻は、一時これを追ったのち転じて赤城に向い、14時15分ごろには300メートル内外に迫った。ために赤城は再び苦境に陥ったが、14時20分来速に火災を起させて危機を脱した。

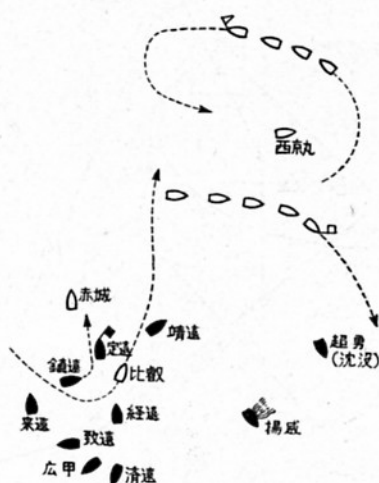
西京丸は、初め千代田の後方に敵を望んで戦闘したが、本隊の外側にあったためにしだいに孤立し、比叡・赤城の危険を報じたのち、定遠・鎮遠などの迫るところとなり、諸所に損傷を生じ、14時22分舵も機能を失ったので「我舵故障アリ」の信号を掲げ、左に方向変換中の第1遊撃隊に近づいた。

第1游撃隊の殿艦浪速は、停止して西京丸を通過させ、そのために一時孤立して、定遠・鎮遠・靖遠の合撃するところとなったが、奮戦して危機を脱し定位に復した。この間水雷艇が近接したので、高千穂・浪速は機砲で撃退した。

浪速の前方を左から右に過ぎ、本隊に近づきつつあった西京丸は、14時40分平速・広丙および水雷艇に迫られ、特に水雷艇福竜は、同艦の左舷に肉迫して2発の魚雷を発射し、さらに40メートルの近距離で第3発を発射したが、いずれも命中せず、西京丸は無事戦場を離れて、チャンサンコツ鰯地に向った。

すでに第1游撃隊は、敵を左舷に望んで14時35分第3回の射撃を開始した。本隊は、これより先一時敵と離れたので射撃を中止したが、近づくに及んで再開し、敵を右舷に望んで第1游撃隊と約6,000メートルを隔ててこれをはさみうった。

13時30分頃の両軍態勢



水雷艇 六 丙 平遠
水雷艇

14時40分ごろ敵の陣形はまったく混乱し、平遠・来遠も火災を起して、広丙は陸に、揚威はターラー島に向って去ろうとした。

戦闘の経過（3）

第1游撃隊は、敵と反航して過ぎたので、14時54分また左180度方向変換を行ない、背後から敵に迫り、次いで右90度に方向を変え、12ノットに減速して本隊に対して直角に進み、第4回の射撃を開始した。司令官は本隊と相まって十字に敵を射撃しようとしたが、有効射程に入るに先だち、本隊が敵を過ぎてしまったので、その企図は果されなかった。

しかし、勝敗の帰するところはすでに明らかで、15時10分ごろ定遠も火災を起し、15時30分致遠もハイ얀島の北東約30哩の所に沈み、次いで済遠を先頭として、広甲・経遠・来遠・靖遠の諸艦がターリェン湾の方に向って戦場を離れ始めた。第1游撃隊はこれら諸艦を追撃し、水深に注意しながらまず経遠に迫り、17時29分ターワンチャ（大王家）島東方約20哩（北緯39度32分、東経123度33分）の所に撃沈した。

本隊はなお定遠・鎮遠を砲撃していたが、15時26分旗艦松島は30.5センチ砲弾により大損傷を生じ、舵取装置も損じた。そこで司令長官菅旗を掲揚させたが、各個運動の時機はすでに過ぎていることを思い、間もなく「本隊＝帰レ」と信号させた。

やがて第1遊撃隊の追撃を免がれた敵の諸艦は、再び定速の付近に集まった。また日は今や没しようとしているので、司令長官は第1遊撃隊が遠く離れているのを不利とし、17時40分これと呼んだ。

17時55分先に戦場を離れた赤城は、応急修理を終って再び本隊に合した。



第1游撃隊は、経遠撃沈後、先にターフー山沖に走った靖遠および来遠を追おうとしたが、17時45分招還の信号を認めて針路を変え、18時30分本隊に合した。

時に、司令長官は敵が針路を南方にとるのを認め、ウェイハイウェイに向うものと判断し、夜戦は隊列の混乱を招く恐れがあるばかりでなく、敵は水雷艇を伴っているため夜中追撃するのは不利であると考え、明朝ウェイハイウェイ沖でさえぎることに決め、敵と平行と想像する針路をとって南下した。

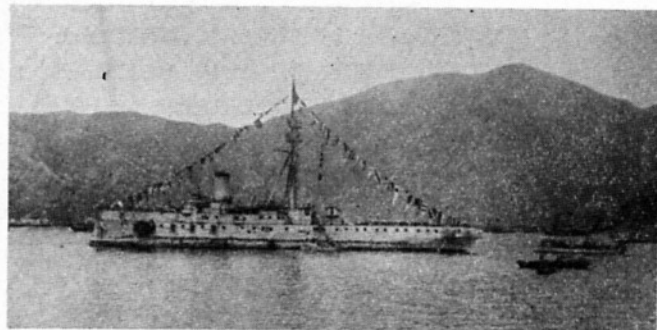
戦闘後の行動

松島は損傷のため旗艦に適しくなくなったので、司令長官は、19時15分将旗を橋立に移し、松島を呉に回航させ、他の諸艦を率いて南航したが、18日天明、敵を見ないので、比叡および西京丸の消息を確かめるとともに敵の行動を探るため、前日の戦場に引返すこととし、第1游撃隊を先発させて、05時30分赤城にチャンサンコツ帰航を命じ、本隊を率いて北航した。

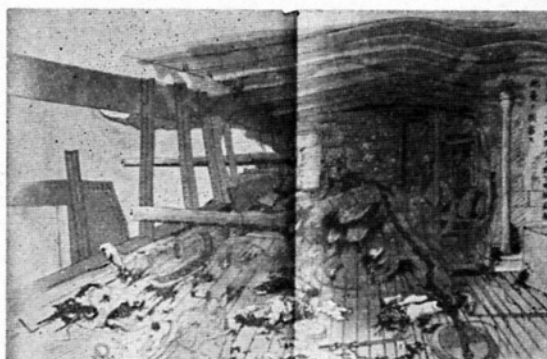
13時00分、前日の戦場に近く前路に煙を発見したので、これに対して運動したが得るところなく、タールー島の南西方約6浬、水深約5.5メートルの所に乗揚げている揚威を発見し、千代田をして点検の上破壊せしめ、18時00分帰途につき、翌19日の08時00分、在泊諸艦の登舷の礼を受けながらチャンサンコツ錨地に帰投した。

これより先、西京丸は18日01時15分、比叡は同日05時50分、赤城は16時46分に帰投、比叡は負傷者を運送船に送ったのち、戦闘に加わるために、18時50分海門とともに錨を抜き、まずハイヤン島に向った。

西海艦隊司令長官は、上陸作業に対する海軍の援助は必ずしも必要でなくなったのを確かめ、16日正午作業をやめ、15時00分所在諸艦を率いて出港、17日チャンサンコツ錨地に入り、18日西京丸の帰航により状況を知ったので、第2游撃隊・八重山および来会した水雷艇3隻に準備を命じ、伊集院参謀官に、山城丸および他の水雷艇の招還ならびに佐世保に弾薬請求のことを依頼した上、04時30分上記諸艦艇を率いて出動し、18日ウェイハイウ



海戦後内地に帰還した松島。10月2日呉で天皇の臨御を仰いだ際の写真で、艦首部に大きな破口が見える。



木村浩吉少将（当時松島水雷長大尉）の描いた被弾した松島艦内の惨状

ェイ付近に進出したが、なんら得るところがないので帰途につき、19日朝本隊などの帰航を望みながら、06時00分帰投した。

比叡および海門は、19日正午ごろハイヤン島付近に達したが、これまた得るところがないので、ターフー山沖を経てヤールー川口に向い、夜中変針して20日06時30分帰投した。

松島は負傷者の入院を急ぎ、20日佐世保に入り、送院後長崎で仮修理を行ない、28日呉に到着して修理に着手した。

戦場を去った敵艦のうち、広甲は17日23時00分ごろターリエン湾外の陰礁に乗り揚げたが、済遠は18日03時30分、その他の諸艦艇は天明後に逐次リュイシュンに入った。リュイシュンを選んだのは、修理施設がありしかもウェイハイウェイよりも近かったからであるという（ウェイハイウェイには修理施設がない）。

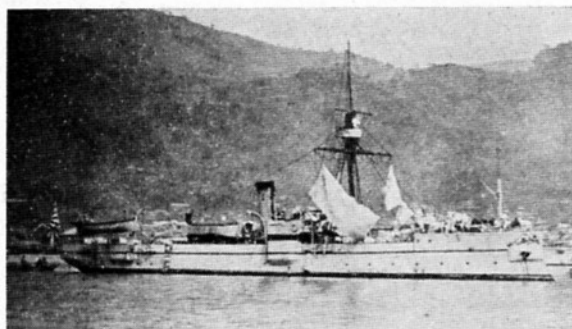
ターフー山沖に残留した砲艦、水雷艇および運送船は、わが方の目に触れることなく、数日後無事リュイシュンに帰投した。

わが第5師団は、16日ピョンヤンを占領した。

戦果

この戦闘において、清国は経遠・致遠・超勇・揚威・広甲の5隻を失ない、済遠・平遠・広丙の3艦を除く各艦は、みなかなりの損傷を受け、10月18日初めてリュイシュンを出てウェイハイウェイに移った。

わが方には艦船の喪失はなかった。しかし、損傷のないものはなかったが、松島・比叡・赤城および西京丸を除く諸艦は、チャンサンコツ錨地で工作船により修理を終え、22日すでに次期行動を開始することができた。上記の4艦は、内国に回航して修理を行ない、赤城は10月25日、西京丸は同30日に復帰、松島は11月4日帰隊して13日再び



数々の損傷を受けながら根拠地に帰投した赤城

旗艦となり、比叻もまた14日復歸した。

これより先、大本営は8月31日冬季作戦方針を定め、今後制海権を獲得するときは、ターリエン湾にも一部の軍隊を送り、チンチュウ（金州）半島を占領するものとしていたが、この戦勝の結果、直ちに発動することとなり、聯合艦隊は9月22日早くも準備行動を開始し、10月23日ホワエンコウ（花園口）において第2軍を上陸させるに至った。

敵はもはや出動する気力はなかったようであるが、定遠・鎮遠以下がなお存在する以上、わが方としてはまったく心を許すことはできなかった。戦果は徹底を欠いたといえよう。

戦訓

海軍革命の所産である汽走鋼艦の戦術には種々の論があり、戦闘隊形も群陣、鱗次陣、横陣、梯陣などの主張があったが、旗艦先頭の単縦陣が指揮容易、行動簡便であることが立証され、各国ともこれを基本とするようになった（注13）。この単縦陣で舷側砲火により敵を一翼から撃破したのが、やがて丁字戦法に発展したものである。

また、艦隊を重装の本隊と軽快な游撃隊に区分し、游撃隊を偵察部隊とし、また戦闘に際しては助戦部隊として活用するのは、10年後の日露戦役における第1戦隊と第2戦隊、あるいはその拡大である第1艦隊と第2艦隊、すなわち戦闘部隊(Battle Force)と偵察部隊(Scouting Force)に発展するもので、海軍革命後のもっとも合理的な編成法であった。清国側には、編成らしいものはない。

当時は、一般に砲戦だけで勝敗を決することはなく、衝角突撃・魚雷戦・敵艦襲入などの接戦によらなければならないと考えられていて、この海戦で砲火だけで敵艦を沈没させた上、遂に勝敗を決したのは意外とする者が多かった。清国側には、接戦を試みたものがあつたが、成功しなかった。

速射砲は、当時の口径では装甲を貫徹することはでき

ないが、大きな射撃速度で敵を圧倒し、非装甲部を破壊して、戦闘力を失なわせることができるという期待もほぼ正しいことが証明された。

これとともに装甲防禦の勢力および必要性も疑いがなくなった。定遠・鎮遠は200発といわれる命中弾を受け、非装甲部を破壊されながら最後まで戦い、致命的な損傷を受けず、海戦後もなおわが方に不安を与えていたが、当日15時30分、松島の4番12センチ砲門に入った30.5センチ砲弾は、砲側に準備してあった装薬を爆発させ、砲台を大破させ、一挙に28人の生命を奪い、68人を傷つけた（うち22人は死亡。同艦定員は、旗艦増員を合わせて約400人）。砲廓のような隔壁防禦により、破壊勢力を局限する必要があつたわけである。

兵学界には、水上発射管に装填してある魚雷の頭部が、命中弾により爆発する危険を指摘する者があつた。清国側では、射出して捨てたものがあつたということである。

わが方の優速が勝因のひとつであることは、内外の等しく認めるところであつた。

戦闘中の火災も大きな課題となった。清国側は、すでに豊島沖海戦の戦訓により処置するところがあつたというが、わが方では、木造船および木具が火災を起し、木片が飛散して危険であると認め、明治27年12月10日、当時建造中の諸艦から始めて、やむをえないものを除き、木材の代りに亜鉛メッキ鋼板を用いることとした。

注13) 当時常備艦隊参謀(大尉)であつた釜屋忠道中将は、開戦前佐世保に集合の際、艦隊運動に熟練した将校が少なく、司令長官も心配して、港外に出動して実地に運動を練習し、また港内で汽艇を集めて艇隊運動を行なつてこれを補つたが、また陣形の議論については、対抗運動を実施し、単縦陣で「先頭艦に続け」で信号なしに運動する方の勝つことが確実となつたので、これに決したと述べている(戦袍余薫懷旧録)。

海上保安庁で関門海峡の交通調査を実施

海上保安庁の門司海上保安部港務課では、関門港の海難防止資料作成のため、関門港東口の早瀬の瀬戸で、去る8月10日午前10時から、24時間にわたる通航船舶の交通調査を行なつたが、その結果一日の交通量は予想していた700隻の線をはるかに上回り、905隻に達した。内訳は500総トン以上の汽船が73隻、機帆船519隻、小型鋼船165隻、その他148隻となっており、ラッシュタイムは正午から午後2時までと明方の6時から8時までの転流前で、実に1分間に1隻の割合で通過していることが分つた。午後10時から翌朝4時までの夜間通航は比較的少なく128隻で、夜間通航制限はよく守られていた。